

日本女子大学におけるトランスジェンダー女性受け入れ 決定に至る経緯と迎え入れ準備 — 小山聡子教授らへのインタビュー調査から —

Process of Consensus-building for Acceptance of Transgender Women
into Japan Women's University, and Preparation for them:
An Interview with Prof. OYAMA Satoko & Other Key Persons

小山聡子 *・中西裕二 *・浅田誠 **・行田恵 ***
西尾亜希子 ****・安東由則 ***** (編集)

OYAMA, Satoko, NAKANISHI, Yuji, ASADA, Makoto, & KODA, Megumi
NISHIO, Akiko, & ANDO, Yoshinori (ed.)

目次
はじめに
I. トランスジェンダー女性の受け入れ契機と検討の始まり
1. 2015年以前のトランスジェンダー対応
2. 2015年末のTG児童の保護者からの問い合わせと対応
3. 保護者への回答後の学内での検討・対応について
4. トランスジェンダーに関するシンポジウム開催と新聞報道
5. 新聞報道の内容とその影響
6. 女子大学間での情報交換
II. 全学的な議論の始まり
III. 仕切り直し後の議論
1. アンケート調査の実施と検討
2. 学内研修会の実施
3. 学生への周知とその受け止め
4. 同窓会や保護者への説明と反応
5. 学外からの反応
IV. 受け入れ公式発表後の準備
1. 入学に際しての事前チェックとガイドラインの作成
2. 学生向け講習・説明会とそこで出された不安への対応
3. これまでの取り組みに対する評価と課題

* 日本女子大学 人間社会学部・教授 ** 日本女子大学 入試・広報部長

*** 日本女子大学 学生生活部・ダイバーシティ推進室課長

**** 武庫川女子大学 共通教育部・教授 ***** 武庫川女子大学 教育研究所・教授

はじめに：インタビュー調査の経緯・目的と編集手続き

研究の経緯と目的

本研究の契機は、2015-19年度に実施した日米の女子大学比較研究（科研 15K04327）において、アメリカのスミス大学を訪問した際（2017年11月）に聞いた、トランスジェンダー女性の入試出願をめぐる騒動とそれ以降の女子大学の取り組みである。騒動の発端は、2013年の入試においてトランス女性がスミス大学に出願してきたが、書類不備ということで大学が門前払いしたことであった。これに対し、出願したトランス女性がSNSを通じて抗議を行い、それに呼応して性的マイノリティ支援団体や学生団体が抗議運動を繰り広げた。マスコミがこれを取り上げて、全米で議論を呼んだのである。抗議運動の盛り上がりを機に、全米の女子大学はトランス女性の入学について検討を始め、2015年頃には10校以上の女子大学がトランス女性の入学を許可する決定をした。筆者がスミス大学を訪れた2017年は、そうした騒動が一段落した後であった。

この年、日本の女子大学でもトランスジェンダー女性受け入れに関連した動きが見られた。日本女子大学人間社会学部主催のシンポジウム「『多様な女子』と女子大学」（2月開催）が新聞記事（朝日新聞「『心は女性』女子大入学可能に？日本女子大、検討へ」2017年3月20日朝刊）となり、女子大学へのMtF（Male to Female）トランス学生の受け入れについて、始められようとしていた議論を後押しすることとなった。最初の受け入れ決定は、2018年に表明したお茶の水女子大学で、奈良女子大学がこれに続き、国立大学が先行した（2020年度より実施）。私学では2019年に宮城学院女子大学が初めて表明し（2021年度より実施）、2020年に発表した日本女子大学は全国で4校目の受け入れ表明となった（2024年4月実施予定）。その後、ノートルダム清心女子大学が2022年6月に受け入れを発表し、翌年の2023年4月から受け入れを開始している。

日本女子大学の場合、トランス女児の母親から附属中学への問い合わせが2015年末にあって後、2017年度より大学に議論の場を限りトランス女性の受け入れ検討を始めており、日本で最も早く取り組んだ女子大学である。よって本研究では、受け入れ決定過程での議論、受け入れに向けての具体的な取り組み、その中で見えてきた課題を尋ねることとした。インタビューの主対象は、附属中学への問い合わせ以降、一貫して受け入れ検討で中心的な役割を果たしてこられた小山聡子教授とした。

インタビュー及び編集手続き

インタビューに至る手続きは、以下の通り。2022年6月にインタビュー調査のお願いを日本女子大学人間社会学部の小山聡子教授に送付し、快諾を得た。その後、安東と西尾が作成した質問骨子を7月初旬に送付した。小山教授とインタビュー参加者には、事実確認、回答準備をしていただいた。

同年7月29日に実施したインタビューは、許可を得てICレコーダに録音した。業者に依頼して文字起こし原稿を作成した後、安東が原稿と音声をチェックして文字起こし原稿の確認と再構成を行なった。インタビューでは、送付した質問項目に沿って予め詳細な説明を用意しておられ、小山教授が代表で順次お答えいただいた。後述のインタビュー記録では、質問内容を明確にするため、安東が質問を行い、質問ごとに回答いただく形式に統一した。また、関連ある内容が前後して語られ、話しの文脈に影響がないと判断した場合には、それらをまとめて示すようにした。このように編集した原稿を小山教授に送付し、確認と修正・加筆をしていただく作業を3度繰り返し、掲載の最終確認を得た。

なお、掲載している年表は、日本女子大学からいただいたもので、安東が一部加筆した。インタビューに際し、多大な時間をかけ準備をいただいた小山教授、関係者の皆様に深く感謝いたします。

日本女子大学におけるトランスジェンダー学生受け入れ決定に至る経緯と迎え入れ準備 — 小山聡子教授らへのインタビュー調査から —

日 時：2022（令和4）年7月29日（金）10時30分～12時

場 所：日本女子大学 新泉山館2階・会議室2

参加者：小山聡子・中西裕二・浅田誠・行田恵（以上、日本女子大学）
安東由則・西尾亜希子（以上、武庫川女子大学）

参加者の紹介：

小山聡子：日本女子大学人間社会学部教授（副学長（2015.4-2017.3）、人間社会学部長（2017.4-2021.3）を歴任）。専門は社会福祉学で、ソーシャルワークの理論と方法及びその教育のありかた、そして「障害と福祉」が研究テーマ。3カ所の障害児者施設で指導員、ソーシャルワーカーとして実践を積んだ後、研究者となる。日本女子大学におけるトランスジェンダー女性の受け入れ決定及びその後の準備にダイバーシティ委員会の責任者として取り組まれている。著書として『援助論教育と物語 対人援助の「仕方」から「され方」へ』（単著、生活書院、2014年）、『LGBTと女子大学 誰もが自分らしく輝ける大学を目指して』（共著、学文社、2018年）等がある。

中西裕二：日本女子大学人間社会学部教授（人間社会学部長（2021.4-2023.3）を経て、現在大学院人間社会研究科委員長）。専門は民俗学・文化人類学・宗教学で、巡礼と観光に関する研究、日本における「憑きもの信仰」の研究などを行なっている。著作として、『憑依と呪いのエスノグラフィ』（共著、岩田書店、2001年）『民俗文化の再生と創造』（共著、風響社、2005年）等がある。

浅田 誠：日本女子大学入学・広報部部長として、受け入れ検討に加わり、準備作業を進めている。

行田 恵：日本女子大学学生生活部・ダイバーシティ推進室課長として準備作業を進めている。

I. トランスジェンダー女性の受け入れ契機と検討の始まり

1. 2015年以前のトランスジェンダー対応

安東 ではまず、2015年以前のことについてお尋ねします。2015年末に附属中学へトランスジェンダー児童の母親から入学についての問い合わせがあり、それが受け入れ検討の議論を始める発端であったと聞いております。一方、現在トランスジェンダー男性として積極的に活動されている杉山文野さん¹は、幼稚園から高校まで日本女子大附属に在籍し、2000年頃に高校を卒業されています。ですから、2015年以前に、トランスジェンダーの学生・生徒・児童に対する配慮、例えばFtMの学生やトランスジェンダー教職員への対応、通称使用、共同トイレ、ハラスメント研修など、何らかの取組みをされていたのかについて、まずお伺いします。

小山 いろいろなことがありまして、今回聞き取りを受けるにあたり、こうだったなと私も改めて復習をしたという次第です。幼稚園は男女共学であり、また過去に附属小中高で個別に何らかの対応をされた面はあるのだろうと想像するのですが、各校園全体であるとか、ましてや私が一定期間、役職を務めていた時期に大学の中央に伝わってくることはありませんでした。

¹杉山文野さんは幼稚園から高校まで日本女子大学附属学校に通学したFtMのトランスジェンダー。附属高校卒業後は早稲田大学に進学・卒業した。現在、東京レインボープライド共同代表理事、NPO法人「ハートをつなごう学校」代表など。著書として、(2006)『ダブルハピネス』講談社、(2020)『元女子高生、パパになる』文藝春秋社など多数。

(附属出身の) 杉山さんの話についても、杉山さんが個別にこういうことがあったとおっしゃってはいませんが、そのことをもう少し一般化して、各校園で何らかの対応一般につなげていこうということはあまりなかったのではないかと想像しています。

浅田 その通りだと思います。

小山 私自身が2015年度から副学長を2年間、その後、学部長を4年間務め、その役職では同時に学園の理事を務めますので、学校法人全体の運営に関わることになります。その範囲でしか見聞きしていないですし、それ以前の役職者が何か聞いていたかもしれないので、いい加減なことは言えないのですが、あまり耳には入ってはこなかったですね。(事務方、同意)

安東 大学自体でもあまり具体的な動きはなかったわけですね。大学での学生サークルの活動状況(レインボープライドなど)や教員のジェンダー研究の蓄積についてはいかがでしょうか。

小山 教員のジェンダー研究の蓄積については、こういう取り組みもあったので、以前、私個人で非常勤の先生も含め、提供されている授業のシラバスを対象に「ジェンダー論」であるとか「女子教育」、「フェミニズム」といったキーワードで検索をかけてみたところ、特に「ジェンダー論」などは、ものすごい量が出てきました。個別に行なっている人はたくさんいることを改めて知った次第です。

お茶の水女子大学がされているように、「全学ジェンダー学際カリキュラム」というような括りで、まとめて学生に提供し、サーティフィケート(Certificate 証明書)を出すというようなことはまだできていないので、今後の課題ですが、ジェンダー研究自体は、いろいろな教員が多角的に行なっていると思います。

一方、学生サークルなどの活動状況は、“クラブ連合”といって一定のプロセスをクリアして大学に公認されればサークルとして認めていくという仕掛けを持っていますが、そういうオフィシャルなものとしてはなかったということです。インフォーマルにはあるようですが。

安東 分かりました。これまで受け入れを表明した大学は、ある程度、教員のジェンダー関係の研究蓄積があり、中心になって動く教員がおられるように思いましたので、伺わせていただきました。

2. 2015年末のTG児童の保護者からの問い合わせとそれへの対応

(1) 問い合わせ以前の状況

安東 次に、2015年末の附属中学への問い合わせ以前とそれ以降のことについてお尋ねします。まず、トランスジェンダー児童・生徒の入学については、この問い合わせが初めてのケースだったのででしょうか。また、保護者からの附属中学入学に関する問い合わせを受け、それを全学として取り上げ、直ぐに検討プロジェクトを立ち上げられたということは、学園の中でトランスジェンダーの生徒や学生に対する意識もかなり高まっていたということでしょうか。

日本学術会議で、奈良女子大の三成美保教授(当時)が性的マイノリティに関する分科会を立ち上げ、津田塾大学の高橋裕子学長も参加されるなどして議論が始まったのが2015年でした。アメリカの女子大学の情報を、高橋学長が論文に書かれたのもこの頃でした²。日本でも徐々に、トランスジェンダーのことが取り上げられる機運はあったのかなと思います。

²高橋裕子(2016)「トランスジェンダーの学生をめぐる入学許可論争とアドミッションポリシー」『ジェンダー史学』12号, pp.5-17. この論文は、修正を加えられ、三成美保編(2017)『教育とLGBTIをつなぐ: 学校・大学の現場から考える』(青弓社)に収録された。

小山 大学執行部に届いたものとしては、これが本当に初めてだと思います。もしかしたら知らないところで、現場の判断で「そんなの無理」と断っていたのかは分かりませんが。その時、私は副学長であり、当時から、そういう国内外の社会情勢に対して敏感にアンテナを張っていた事務職員の方がいたという印象を持っています。それは事務的な窓口の判断のみで断ってはいけないと考え、しっかり上層部に相談する事務職員の方がいたということであり、何らかの意識は醸成されていたのでしょうか。また、そのことをしっかりと受け止める学長がいたということです。

このような案件が生じるかもしれないので、以前からその準備があったかということ、殊さら検討はしていませんでした。ただ、社会情勢も踏まえていろいろな人の意識が少しずつ高まっていたからこそ上部に相談もありましたし、しっかり検討しようとの機運になったと捉えています。

表 1. トランスジェンダー女性受入れの経緯①（契機と検討のスタート期）

時期	出来事
2015年12月	附属中学校に対して、トランスジェンダー（MtF）児童の保護者から受験に関する問い合わせが学園に。「検討プロジェクト」の立ち上げ（2016年1月）
2016年11月	中学校では、トランスジェンダー児童の受け入れは時期尚早と結論し、保護者に伝える
2017年2月	人間社会学部学術交流研究事業・シンポジウム「多様な女子と女子大学」を実施 参加者：高橋裕子（津田塾大学長）、田中かず子（ICU元教授）、杉山文野（附属校出身）他 （→ シンポジウムの内容をまとめ、『LGBTと女子大学』とのタイトルで2018年4月に学文社より出版）
2017年3月20日	朝日新聞報道「『心は女性』女子大入学可能に？ 日本女子大、検討へ」（1面） 『『女子とは何か』問い直す大学 トランスジェンダー入学検討 歓迎と課題』（3面）
2017年4月	学長（佐藤和人）の指示により「LGBT 課題検討ワーキング」の立ち上げ
2017年6月19日	朝日新聞報道「『心は女性』学生の受け入れ 女子大8校が『検討』」
2017年6月25日	朝日新聞報道「『心は女性』受け入れ検討の理由」 津田塾大・高橋裕子学長と日本女子大・小山聡子人間社会学部長へのインタビュー
2017年12月	18女子大学で情報交換の実施 （4女子大経過報告・・・お茶の水、津田塾、東京女子、日本女子）
2018年5月	お茶の水女子大学から2020年度から受け入れとの連絡 → ワーキングメンバーがお茶大訪問へ
	3女子大学（津田塾、東京女子、日本女子）と奈良女子が学長レベルの話し合い （於：津田塾大）

※日本女子大学から提供された資料を基に作成。網掛け部分は安東が追加した出来事（以下同様）。

安東 大学と附属校の意思疎通が希薄なところも多いかと思うのですが、日本女子大学では附属校園との連携・意思疎通は強いのでしょうか。中高のことも一緒に考えるという姿勢がありますか。

小山 あります。現在は、理事会に附属校園の校園長の中の一人が理事として入るようになっていいます。それ以前にも附属校園担当の理事がいて、附属校園連絡運営会議で月に1回は必ず集まり、運営上のことや課題になっていることを、学長、理事長、事務局長もいる場で、一緒に話し合うという仕組みを持っていました。私は、副学長時代から続いて学部長時代も含めた数年間、附属校園担当理事を務めたので、法人が附属校園と大学とを一体として、しっかり考えていこうという機運の中で仕事をしました。

中西 学園一貫教育研究集会などもあります。

小山 こういった課題をめぐる研修体制にも関わるのですが、学園一貫教育研究集会というものが年

に1回あり、これは学園全体の学会的な感じの研究集会です。年ごとにいろいろなテーマを掲げているのですが、ここ何回かは性の多様性についてしっかり学んでいこうということで一元的に取り組んでいます。

安東 法人としての日本女子大学では、附属も含めて16名の理事がおられますが、そのような体制でするので、なかなか一元的に議論するのは大変ですね。

小山 附属校園からも理事が出るようになってからは、まだ2年くらいです。常任理事会の中に、オブザーバーとして必ず附属校園長が全員入るという形で始まり、徐々にもっとしっかり組み込まれていくようになったプロセスがあります。この辺りも大学によって全く違いますね。

(2) 検討プロジェクトの立ち上げと話し合い

1) 構成メンバーと話し合いの参考資料

安東 トランス児童の母親からの問い合わせ後、直ぐに検討プロジェクトを立ち上げられました。そのプロジェクトメンバー構成と、受け入れについての議論を主導した方について教えてください。

小山 毎週水曜日が組織運営をめぐる一連の会議日で、その日に話し合う議題などを整理するブリーフィング(学長室会議)があり、そこで当時の学長(佐藤和人学長)から、私が責任者を務めてプロジェクトで検討するように指示を受けました。副学長を務めていた私の専門が人々の人権を重んじる社会福祉学ということもあったと思います。メンバーは、責任者である私の他、4学部(当時)の代表者、カウンセリングセンター長と事務局長を含む事務局から3名、あとは幼小中高それぞれの校園長1人ずつの構成で、計12人でした。

安東 大人数のメンバーですね。

小山 人数としてはそうなのですが、雰囲気は割とインフォーマルな感じで、学長直下の、特定の規程などもないプロジェクトだったということです。

安東 そのプロジェクトでどのような議論がなされましたか。

小山 まず附属校園それぞれの意向や事情を丁寧に出し合い、話し合いました。事務局からは女子校に対して文部科学省が持っている方針を、また神奈川県にある附属中学校からは県に対して方針を確認したりしました。

安東 関東近辺の私立中高にも伺われたようですが、何か取り組みを始めた事例はありましたか。

小山 かなり時間がたつので、記憶が本当に曖昧になってしまっており、当時の資料を見たのですが、どれも、なかったですね。

安東 議論を行うにあたり、助言を得た人物や機関、参考とした資料などがあれば教えてください。

小山 これについては、種々の講演会情報や新聞記事、ネット記事の他、ICU(国際基督教大学)の『できることガイド』³、それから2015年に文科省が出した対応指針「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」や教職員向け版⁴、定義づけについては日本精神神経学会の『性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン』第4版(2011年版)などを見ました。あとは事務局で、関東に限定してですが、私立中高の出願資格を調べたことなどです。

³2016年に国際基督教大学のジェンダー研究センターが『できることガイド in ICU』を発刊し、ネットに公開した。これは日本の大学におけるLGBT支援ガイドの先駆けと言えるものである。

⁴文部科学省は2015年にこの通知を発出し、翌2016年に教職員用冊子を発行した。https://www.mext.go.jp/content/20210215_mxt_sigakugy_1420538_00003_18.pdf

※ 記載しているネット資料については、2023年6月21日に、すべてその所在を確認した。

その他、お茶の水女子大でLGBT法連合による『「LGBT」差別禁止の法制度って何だろう⁵』というトークセッションがあり、私が学内の検討責任者を務めていたので、自発的に参加するなどして、参考にしました。

2) 話し合われた内容

安東 では次に、検討プロジェクトで話し合われた内容についてお聞かせください。

小山 検討プロジェクトの中では、皆さんから、特に附属校園長の“アンビバレント”な思いが本音としてしっかり出され、共有されました。結果は時期尚早との結論になったのですが、すごく本音を出し合えたいい話し合いだったと、皆で盛り上がったのを覚えています。

“アンビバレント”とは何かというと、附属中高では、附属出身のトランスジェンダー男性である杉山文野さんの経験もあるので、問い合わせの方も長い間、女の子として暮らしていて、日常生活では普通に女の子として違和感のない人なのだろうという想像を当時の附属中学校長がされていました。ですから、フッとそこにいたら恐らく何の問題もないと思うけれど、表立って言われて入学していただくと、他の保護者の方への説明やいろいろな対応がとても難しい。「入れてあげたいな、でも難しい」という両方の思いが語られました。これに関して現場の当事者となる校園長がお互いに「そういうことだね」と言い合うなど、いろんな話し合いをした感じでした。

安東 この時点では、大学のこととしてではなく、まず附属中学校のマターという認識ですね。

小山 そうですね。本音を出した話し合いができたからこそ、今後はぜひ大学に限って、しっかり検討を継続してほしいという要請が附属校園から上がってきました。そこにいた大学のメンバーを含めて、自然と「それはやっていくべきだ」という議論に帰着したのだと思います。

安東 検討プロジェクトの主要議論の一つである在学中の性別変更についても、この時点では結論が出なかったということでしょうか。

小山 出なかったですね。主要議論の一つ目が戸籍上男性のまま入学を許可するか否か、もう一つが在学中に性別の取扱いが変更された場合の対応でした。改めてこれまでの経緯を復習しながら、「隔世の感があるな」と思っています。大学レベルでは、こんなことは今なら完全にクリアしているのですが、そのときは、そこで引っかかっていたんだなと思います。やはり時代って進んでいくんですね。

安東 非常に短い間に変わりました。

小山 はい、短い間に。ただ、このときのことを振り返って個人的に思うのは、やはり女子校、女子大であることの本旨は何かという、とても本質的な課題ですね。そこの関わりであったのだと改めて思います。ここに関しては、7年を経て皆が納得する答えが出ているかと言われたら、そこが問題です。

3) 保護者への回答

安東 結局、附属中学への入学について問い合わせしてきたトランスジェンダー児童の保護者への対応としては、10ヶ月以上の検討を経て、時期尚早ということをお伝えになったわけですね。

⁵2016年9月19日、お茶の水女子大学で、このタイトルのトークセッションが行なわれた。これは、LGBT法連合会が、LGBTが抱える困難や自治体における対応の好事例を集めた書籍『「LGBT」差別禁止の法制度って何だろう?』（かもがわ出版）の出版（2016年5月）を記念して開催された。<https://www2.igs.ocha.ac.jp/events/events-2016/2016/09/919/>

小山 はい。2016年11月を回答期限と設定して、プロジェクトの責任者だった私の名前で回答案をつくりました。ただ、それを紙1枚でお送りするのではいけないだろうということで、意を決して、当時の校長が直接、お母様に電話をされました。

回答が遅くなったことをお詫びした上で、主には、現段階では環境が整わないことを理由に受験許可は難しいのだけれど、大学レベルではさらに検討しますということ、さらに、本学の附属中学に声をかけてくださり大変光栄なことでしたという応答をしました。

本学園の生徒や教職員、保護者など、学園を取り巻く環境において、まだ十分な理解が整っていないと考えられるからこそ、入学後に適切かつ円滑な教育環境を提供できるかという点で支援体制が不十分になると言わざるを得ない。入学後の学生生活で、万一何らかの支障が生じた場合、現状では専門カウンセラーの配置などもすぐには難しく、適切な対応ができなければどうするかという心配がある。さらに、本学では幼小中高から大学までの一貫教育を行っているので、中学校で入学いただいたら、その後上級課程に進み、それぞれの課程で対応に齟齬があっては行けないが、学園全体での理解を浸透させるにはまだまだ時間が必要だ、といった理由を述べました。受験を考えてもらい光栄だと言った後、具体的には、まず大学での体制をできるだけ早期に整えるために、早速、詳細な検討を開始する所存だということまでお伝えしました。

そうすると保護者の方から、すぐに断られると思っていたのに、そこまで時間をかけて検討したこと、大学でさらに検討を続けることに対して、非常に前向きだということで、感謝の意を示されました。「うちの娘が貴学を受験できるように勉強を応援します」といった旨をおっしゃってくださいました。日本女子大学がトランスジェンダー女性を受け入れるようになる2024年は、ちょうどそのお子さんが大学生になる年なんです。受験してくださるかどうかわかりませんが、そんなやりとりがありました。そこでのやり取りはとてもポジティブなものでした。

3. 保護者への回答後の学内での検討・対応について

安東 志願者の保護者への回答後、学園内での検討や対応はどうなりましたか。

小山 ここまで申し上げたように、LGBT検討プロジェクトでは、せめて大学レベルの検討を続けるべしとなりました。それから皆が本音で語り合いたい検討会であったという述懐があったので、大学で検討していこうと、もう決まっていたんです。

ただし、1年ごとに存続するかどうかを検討して決める分科会（大学改革運営会議の下に作られた学生支援分科会）の下にある3つのワーキングの中の1つという、非常にアドホックな（限定的な）位置づけでしたから、この課題を中学校での出来事に続いて、大学全体がしっかり検討していくんだという感じは、正直、当時はあまりなかったですね。

中西 そうですね。

小山 教員もそういう認識はなかったですね。検討した当事者たちは、今度は大学でやっていくんだと意気込んでもいましたが、他の多くのメンバーはそういうふうには思っていないようでした。附属校園に関しては、そのことに関する議論は、一旦休止するという感じでした。

ただ、2018年に立ち上がった常設委員会であるダイバーシティ委員会の中には、附属校園長も入ることになりました。大学でそういう検討が進んでいるなら、附属校園にはこういう伝え方をしてほしいといったやりとりをしたり、附属校園でもいずれこういう検討をしなければならぬかもしれないといった議論もなされたりして、検討の素地はできつつあったと思います。

安東 中学校に問い合わせが来たが、今回は断ったとの結果は、全学的にある程度、浸透しましたか。

小山 あくまでも中学校の窓口でやり取りをして、そういう回答が出たというだけで、今にして思えば、それを全学的には言っていないです。ですから、その時点で知っている人は知っているという感じになってしまいますね。自分が知っている、皆が知っているように思ってしまう面がありますが、極端に言うなら誰も知らなかったということかもしれません。

4. トランスジェンダーに関するシンポジウムの開催と新聞報道

(1) シンポジウム開催の経緯

安東 次に、2017年に日本女子大学で開催されたシンポジウムについて伺います。これは新聞に取り上げられ⁶、それが女子大学へのトランスジェンダー女性の受け入れについて議論されていく契機になったかと思います。まず、このシンポジウム実施のねらいと経緯をお聞かせください。

小山 朝日新聞に取り上げられたシンポジウムの開催は、2017年2月でした。実は、このシンポジウムは、附属校園への問合せとか、それでプロジェクトチームを持っていたこととは全く関係のないところで、単独に実施されたことなんです。

私が所属している人間社会学部が実施した学術交流事業の一つで、たまたま以前からこういうテーマに取り組んでいた藤田武志教授が企画したものです。彼は新聞記事を書いた朝日新聞の氏岡さんとも知り合いでした。藤田教授はそこまで、附属中学校の件をめぐる検討プロジェクトにも入っていて、キーパーソンとなって議論を動かしてはいましたが、このシンポジウム自体は、附属の件とは関係がなかったんですね。

当時、私が副学長として検討プロジェクトを取り仕切っていて、大学レベルに絞って継続的に話し合うと決まっていたものですから、そのシンポジウムの最後の挨拶のときに、附属中学にこういう問い合わせがあって、私たち大学で検討を続けるとお伝えしたため、それに連動して、いろいろな方が問い合わせをくださったという流れなんです。

この時点で、トランスジェンダー女性の受け入れをめぐる全学的に検討することが決まっていたかと言われれば、決まっていました。このシンポジウムとは関係なく、もう決まっていたんです。シンポジウムには、すぐく時宜を得たメンバーが集まってくださいました。津田塾大学の高橋裕子学長、それからICU（国際基督教大学）元教授の田中かず子先生と、MtFのトランスジェンダー当事者のSさんと、本学出身でFtMの当事者である杉山文野さんもいて、とてもいいシンポジウムだったと思います⁷。

安東 トランスジェンダーの入学となると、一つのポイントは、私学においては教職員のみならず、卒業生・同窓会の反応が気になるかと思います。シンポジウム後、何か反応はありましたか。

小山 シンポジウムに参加する人は、この課題に興味があって集まってくる人なので、学外の人も結構来てくださって、とても前向きの反応だったんです。正直、学内では全く議論が進んでいなかったですし、そういうことやっていたことも知らない人は多かったでしょうね。このシンポジウムを行ったというだけで、特段、卒業生から何らかの反応はありませんでした。

⁶ 『「心は女性」女子大入学可能に？ 日本女子大、検討へ』（1面）、「『女子とは何か』問い直す大学」（3面）との記事が『朝日新聞』（2017年3月20日朝刊）に掲載された。

⁷ 2017年2月25日（土）、「『多様な女子』と女子大学」とのタイトルで開催された。シンポジストはここに記載した4名。このシンポジウムの内容は、日本女子大学人間社会学部LGBT研究会編『LGBTと女子大学：誰もが自分らしく輝ける大学を目指して』（学文社）として2018年に出版された。https://www.jwu.ac.jp/content/files/grp/lecture_news/2016/20170225_02/20170225_02.pdf（日本女子大学）

5. 新聞報道の内容とその影響

(1) 報道内容について

安東 2月にシンポを行ない、約1ヶ月後の3月に記事が出されるのですが、その報道内容は大学の意図を正確に反映したものであったのでしょうか。女子大学のトランスジェンダー女性受け入れについて、かなり大々的に報道された印象があるものですから、確認のためにお聞きしています。

小山 報道内容が大学の意図を正確に反映していたかという点では、反映していたと思うんです。ただ、卒業式の日、関東版は一面の左上に結構大きく出て、「入学可能に」の下に小さいクエスチョンがつく。そのクエスチョンマーク、よくやるやり方だと思うんです。ただ、やや煽りのニュアンスを含む見出しだと受け止めた人がいて、これは誤報だと反感を抱いた事務局のメンバーもいました。

でも、書かれている内容は、こちらの話した内容を正確に反映していました。「ペンは剣より強し」ですから、報道機関は一つどういう書き方をしてくださいなどというこちら側の要望は一切聞かずに、取材者が聞いて、書くのが原則だと思いますが、記者の氏岡さん⁸は、「今回はこういうふうを書いていこうと思うけれど、どう思う？」と、正確を期すために電話でやり取りをしてくださったりしました。一つの短い記事だけに、ニュアンスで、ここをこういう言葉に替えてもらえないかとか思ったりしますが、結果に反映されるか、されないはともかく、そういうところを聞いてくださろうという姿勢があり、すごくこういった検討を後押ししようとする、人権感覚のしっかりした立派な編集委員さんですね。

安東 定評のある方ですね。これ以前にも、他の記者と連名でトランスジェンダー関連記事の連載をされていたので、そういう方向性で、記事を書かれているのかなと思ったものですから。

小山 ちょっと言い方は難しいですけど、正直言ってこのときの報道にすごく背中を押されたというか、しっかり考えていかなければならないという覚悟を、改めてもたせてもらったといってもよいくらいです。このときの報道はそういう意味ではとても大きかったですね。

取材には私が答えたのですが、取材時にはその当時の広報課長と総務部長が両方ついてくださって、3人で答えるということがありました。今の時代で、女子大学の意味って何ですかねと氏岡さんが真摯に問いかけてくださって、改めてはっとしたということがありました。

(2) 第2弾の新聞報道とその後の反応

安東 2017年6月に朝日新聞から、第2弾ともいえる報道⁹がなされ、全国の女子大学へのアンケート調査結果(6月19日)と、小山先生と津田塾の高橋学長それぞれへのインタビュー(6月25日)が掲載されました。これらの記事が掲載された後の反応はいかがだったのでしょうか。

小山 当時、私は学部長をしておりました。私が役職者として含まれていた大学の執行部レベルでは、

⁸氏岡真弓編集委員と杉山麻里子記者の署名記事。氏岡編集委員は教育分野で取材に基づいた優れた記事を書かれており、日本女子大学におけるトランス女性の受け入れについてのシンポジウムを大きく取り上げた。杉山記者は、2016年「LGBTの子 学校つらい」(5月13日朝刊)、「おやじのせなか 杉山文野さん」(6月10日朝刊)、「学生 LGBTに寄り添う」(10月15日朝刊)、2017年3～4月「いま 子どもたちは カミングアウト①～⑧」など、教育問題や性的少数者の取材を精力的に行なってきた。

⁹『朝日新聞』(2017年6月19日朝刊)は全国の女子大学を対象として、トランスジェンダー女性の受け入れに関するアンケート調査を実施し、その結果を『「心は女性」学生の受け入れ 女子大8校が「検討」]、「多様な性受け入れ模索」と題する記事を掲載した。6月25日には『「心は女性」受け入れ検討の理由』として、本文にある二名(小山聡子教授と高橋裕子学長)へのインタビューが掲載された。

「人権の問題」として対応する姿勢を示したものですから、特段の反応はありませんでした。「あなただから、しっかり人権の問題に落とし込んで語ってくれた」といった趣旨のことを言われたので、割といい反応だったと思いますが、学園の隅々の人までがどう思って見ていたかわかりません。いずれにせよ、ここでやめろといったネガティブな意見は一切なかったですね。

覚えているのは、第二弾の朝日新聞報道（6月）があった後に、一人の年配の卒業生の方が、「そういうことはやめなさい、そういう方（性別違和を感じる方）は病気なんだから」といった内容の手書きのお手紙をくださいました。今の認識からすると理解違いをされているご年配の卒業生です。しかし特段、学園関係者でそれはどうなのかということはありません。

もう一人、たまたま報道で知ったという産婦人科医師で、キリスト教の特定の流れに所属する方が、手紙とリーフレットのようなものを送ってこられました。手紙には、「レズビアン、ゲイ、トランスジェンダーの人は悪霊に取りつかれている状態です」と書かれていました。アカデミック領域の方ですが、宗教的な信念でそういうふうにおっしゃったと思います。同時にその方は、産婦人科医としてホルモン薬の処方をつランスジェンダー当事者に対して担っておられる立場なので、「ホルモン投与といっても、一生続けなければならないし、副作用もある。それを続けることが、医師の私から見て、幸せには思えない」といった内容が書かれていました。その人なりの信念をもって助言をしてくださったと思います。学長にも同じものが送付されました。大学として、この方には特段の応答をさせていただいてはおりません。

それ以降、その方からの働きかけはありませんでしたが、宗教的な信念から、そういうふうにおっしゃる専門家もおられるのだと勉強になりましたし、印象的でした。

安東 アメリカの場合は、自校の学生だけでなく、LGBTを支援する外部のプレッシャー団体が大学に押しかけて、大変だったというお話は聞きました。

小山 ウェルズリー大学（Wellesley College）の日系のKodera教授が、研修期間（サバティカル）で本学に来られたとき、先ほど申し上げた藤田教授と私とでお話を伺ったことがありました。その際、ウェルズリーの状況をトランス男性の問題を中心に話されました。入学してからFtMを表明する方が多いとのことでした。トランスジェンダーの学生と言うと、私たちはMtFのことしか頭になかったのですが、ウェルズリーはそういうことが課題となっているんだと印象的に思っただけです。

安東 逆に、私たちの大学ではFtMの学生が多いかなと思っています。私どもの大学では、スポーツ系の学生が少なからずおまして、外見だけでは判断できないとしても、格好や言動からやはりFtMの学生が一定数いるように思います。この点については、西尾先生が詳しいと思います。

西尾 学生の中に戸籍を変えたわけではないのですが、やはり在学中にどんどんホルモン注射だとか打ち始めまして、卒業後には完全に男性として生きている人はいます。

小山 なるほど。私たちもそちらの場合もしっかりとサポートできなくてはいけないということは、通称の使用をはじめ、まだまだ考えていくことがあります。論理的にはどちらも同じことなので。

西尾 そうですね。

小山 東京には女子体育大学が幾つかあり、そこに所属するある教員にお話を聞くと、やはりサッカーや野球などのスポーツをしている方の中には、FtMの方も結構いらっしゃるということです。そのことに対する雰囲気も、大学によってすごく違うなと思いましたね。数年前、ある女子大学の卒業式で、学生が髪を刈り上げた男性のスタイルで来ることがあり、学長が禁止されたと聞きました。今はどうか知りませんが、そういうことに対する大学自体の姿勢はいろいろあるんだと思

いました。

いろんな人が声を出しやすくなる反面、難しさもあります。どうしても MtF の方に焦点が当たりがちなので、そうではない人、例えばノンバイナリー (non-binary) と自覚する人は悶々として、どうしたらいいんだと思っているかもしれません。自ら公表しなくても潜在的にはおられるでしょう。そういうことかなと想像させるような投げかけもあったりします。前向きな側面と難しさと両方あるから、私たちが鍛えられるんだと思います。今回の私たちの取組が、そういう方にとっても資するものになるといいなと思っています。

6. 女子大学間での情報交換

安東 新聞報道があった 2017 年には、幾つかの女子大学の間で情報交換がなされたようです。どのような会だったのでしょうか。

小山 2017 年 12 月、本学を含む 18 女子大学で情報交換を実施しました。とにかくこれもすごくいい会でした。こういうテーマの集まりをすると参加を募り、せいぜい関東一円からいらしてくださるくらいかなと思っていたところ、九州から筑紫女学園大学がいらして下さったんです。

お茶大と津田塾、東京女子、日本女子が、冒頭で少し大学の話をした後、全ての大学がいろんな話をした会でした。その時のことを今でもよく覚えています。『女性に学問は必要がないね』と、今言ったら、もうみんなびっくりすると思うんだけど、それに該当するような、50 年たって聞いたらびっくりするようなことを、私たちがここで言うかもしれないけれど、恐れずに、とにかくいろんなことを、本音を出し合ひましょう。だからこそ、記録は取りません。』と言って意見交換をしました。だから、今、記憶が曖昧になっているのですが、手応えのあるいい会になったのです。

安東 少し前に、三成美保先生（奈良女子大学名誉教授、現・追手門学院大学教授）にインタビューをする機会¹⁰を得ました。その際、アフガニスタン女子教育支援の取り組み¹¹の関係で、国立 2 女子大学と東京の私立 3 女子大学（津田塾、日本女子、東京女子）の 5 女子大学で緩い連携が残っていて、そこである程度、情報交換していたという話をお聞きしました。その中で、お茶の水だけは、何か突然に、学長がパッと決めて進めていったという話も出てきました。

特に国立の場合は、ガバナンスにおいて学長の権限が強くなっていることに加え、“人権”が出てくれば、他のことはあまり心配しなくても、実行できてしまう面もあるのではないかということでした。ある意味、私学よりも国立のほうがやりやすいと言っては語弊があるかもしれませんが、決めやすいようにも思います。同窓会や保護者への説明もそれほどなかったようです。

小山 それはそうだと思いますね。私は、お茶大さんが決定する前、当時の猪崎弥生副学長と、結構インフォーマルにやり取りをしました。私たちがこういう取り組みをしてきたこともすごく褒めてくださっていたんです。お茶大さんが公表する際には、そろそろ公表するというのを、結構前に電話で教えてくださいました。

¹⁰ 三成美保・西尾亜希子・安東由則（2023）「日本学術会議におけるトランスジェンダー議論と奈良女子大学へのトランスジェンダー学生受け入れ経緯と準備」（『研究レポート』53号, pp.1-16.）は、三成美保教授へのインタビュー記録である。

¹¹ この 5 女子大学は、2002 年に「アフガニスタン女子教育のための女性教員研修プログラム策定検討委員会」を立ち上げ、アフガニスタンでの女子教育支援、女性教員支援を行ってきた。2022 年には、支援活動 20 周年の公開シンポジウムを開催した。 <https://www.ocha.ac.jp/news/d011357.html>（お茶の水女子大学）

お茶大の発表直前には、本学のコアメンバーで先方を訪ねて、どういうふうにするのか伺ったとき、石井クンツ先生に言われて印象的だったのは、最後の一人まで了解を待っていたら絶対に扉は開かないという話でした。「一緒に受け入れ会見を開けない？」と、そのときに言われたりもしました。

2018年5月、津田塾の千駄ヶ谷キャンパスで、学長レベルの話し合いが実施され、(私立の)3女子大学プラス、電話で奈良女子大の三成教授が参加されました。津田塾の高橋学長にはおそらく5女子大で共に進めていきたいというご意向があって、三成教授を電話で呼んでおられたのだと思います。はっきりは分かりませんが、高橋学長のあのお気持ちとしては、「ちょっと待とう」とお茶大さんにおっしゃりたかったのではないかと想像します。2018年の段階です。

その辺りまで、3女子大ないしは5女子大で足並みそろえてというのは、当時本学でも、外からの風圧に耐えていくには連帯することも大事だから、どうせ扉を開けるなら一緒がいいと考えていたと思います。それが、徐々に足並みが揃わなくなっていく。お茶大さんが2018年7月に2020年度からの受け入れを発表して後、本学が一旦、2019年3月に理事会で2020年からの受け入れを決めていたものが、準備の都合上、延期になった2019年半ば辺りからです。それ以降、結果としては大学ごとの検討ペースに入っていたように思います。

安東 その後の女子大学間のやり取りや連携はどのようになりましたでしょうか。

小山 2019年5月に、3女子大学¹²の連絡協議会のような集いを本学で実施しました。それまで学長レベルのやり取りを随分していましたが、事務局レベルでいろんな実務的なことを話しましょうということ、もう受け入れを決めていたお茶大さんをアドバイザーとしてお招きしました。持ち回りでやれるかと意気込んでいましたが、なかなかそういう雰囲気ではありませんでした。

私個人としては、連絡協議会を行いながら3女子大で頑張っていくと思っていたのですが、何かその雰囲気が下火になっていったと感じたのは、この辺りからですね。急には進められないんだなと肌で感じました。

安東 奈良女子大は、お茶の水が急に決めたから、うちも続いたという感じでした。だから、見ているのはお茶の水で、そこに負けないように、遅れを取らないようにということで学長が動き出したようです。三成先生はなかなか動きが鈍かったとはおっしゃっていました。

小山 お茶大の当時の猪崎副学長も、そのことをおっしゃっていたのが印象的でしたね。

安東 なかなか関西は保守的なんですよ。

小山 そうですか。三成先生の発言自体は、この間、アイダホビット (IDAHOBIT)¹³のイベントに出席したときもありましたね。

¹² 東京女子、津田塾、日本女子の3女子大学は、毎年9月に情報交換会を持ち回りで行っている。議題はそれぞれの大学から出るが、ここ数年はトランスジェンダー女性の入学に関する課題が議題に上がる。参加者は学長と担当理事、学部長を含め役員レベルが参加し、情報交換会を行っている。

¹³ 国際反ホモフォビアデー (International Day Against Homophobia, IDAHO)。WHO (世界保健機構) が、「国際障害疾病分類 (ICD)」から同性愛の項目を削除することを決議し、同性愛は精神病ではないと世界に宣言した1990年5月17日を記念して制定された。https://gladxx.jp/extra/terms/terms_a/69.html (g-lad xx グラッド)

IDAHOの日である2022年5月17日、「トランスジェンダー排除にどう対応するか—大学、メディア、当事者・支援者の視点から—」と題するオンラインイベントが行われ、石丸径一郎 (お茶大)、小山聡子 (日本女子)、唐沢真弓 (東京女子)、高橋裕子 (津田塾)、三成美保 (前・奈良女)、三浦まり (上智) などが参加した。https://www.outjapan.co.jp/pride_japan/news/2022/5/5.html (アウト・ジャパン)

II. 全学的な議論の始まり

安東 話しは少し戻りますが、2017年4月にワーキングを設置されましたが、その後、正式な委員会の立ち上げ、委員会規程も作成されたのでしょうか。

小山 先ほど申し上げたように、1年ごとに編成される時限的な分科会の中のワーキングでしたので、規程などありませんでした。分科会自体、そのときのホットなテーマを、大学執行部で必要性を勘案しながらスクラップ・アンド・ビルドで、いろいろ組み替えていくような類いの会議体です。

受け入れに関する話し合いも全学的なものになっていなかったことは、先ほど申し上げた通りです。性格としては、明らかにLGBTに関する検討プロジェクトの後継の会議体という感じです。

附属校園では一旦検討を棚上げし、その後、ワーキングでこうした検討や活動を俯瞰するリーフレットを作りました。そうすると、常設の委員会でもないところがリーフレット作るとは、そのお金がどこから出てくるんだなど、結構、皆さんに叱られました。また、このことについて学内にアンケートを取ろうとなったとき、そういう時限的な委員会にそんな権限はないといった議論になり、「そうか、自分（達）ばかり分かっていて、学内すべての構成メンバーにとっての自分事としての議論にし切れていなかった」と非常に反省しました。それで、2018年8月に理事会下に常設委員会としてのダイバーシティ委員会を立ち上げ、規程もしっかりと定め、職名によるメンバーも定めて議論を始めたということです。新聞報道があったからこそ、学内の小さな集まりだった委員会の動きが皆さんの目に止まり、「ちょっと待て、もっと全学的なしっかりしたものにしなさいといけない」という機運が生まれたのかと思います。

安東 2018年夏ごろから、委員会が設置され、本格的な検討が始まったわけですね。

小山 はい。設置が決まったのは8月で、実際の活動自体は、第1回の会議が9月でした。

安東 正式に常任委員会としてダイバーシティ委員会が設置されましたが、そのとき、基本的に受け入れの方針は出てはいたのですか。

小山 いえ、それをどうするかを話し合う会なんです。ダイバーシティは、もちろんSOGIの課題だけではありません。私の専門は「障害と社会福祉」で、当時、障害学生支援委員会も取り仕切っていました。いずれそういったこともこの会に入っていく、もうちょっと広いものになっていくと認識しながら行ったのがその時だったということです。

表2. トランスジェンダー女性受入れの経緯②（全学的な検討体制の構築期）

時期	出来事
2018年7月10日	〔お茶の水女子大学が2020年度からのトランスジェンダー女性の受け入れを表明〕
2018年8月	日本女子大（法人）で常任委員会として「ダイバーシティ委員会」設置
2018年10月	泉会（PTA組織）懇談会にて説明を実施（好意的な意見が多数）
2018年11月	学内教職員向けアンケート実施（記述式）・・・1割から回答、翌年1月に結果公表
2018年12月	桜楓会（同窓会組織）理事会にて現状報告と討議の実施
2019年3月	理事会にて2020年度からのトランスジェンダー女性受け入れを決定
2019年4月	教授会から、決定公表前にガイドラインやマニュアルの共有など更なる準備が必要との強い意見（ジェンダー専門カウンセラー2名との契約（2021年には3名に）・・・学内研修なども対応）
2019年5月	前述私立3女子大学の連絡協議会的な集い（主に事務レベル）を日本女子大で開催（お茶の水女子大からもアドバイザーとして参加）

安東 委員会では、どのようなことをされましたか。

小山 ようやく全学的な検討体制に入りまして、“泉会懇談会”という大学のPTAの会で保護者に説明をしたり、2018年11月には学内の教職員向けの記述式アンケートを行ったりしました。また、卒業生の会である“桜楓会”の理事会で現状報告をしましたが、この辺は全部、好意的でした。

アメリカのミルズ大学レポート¹⁴を読むという研修を2019年に行った際には、津田塾の高橋学長や東京女子大の茂里学長（当時）が駆けつけてくださいました。そのときに印象的だったのは、今はノンバイナリー（Non-binary）のことが一番課題だという話であるとか、「学生にちゃんと意見を聞いたのか？」「それをしないと不十分と捉えられる」といったアドバイスをいただいたことです。

III. 仕切り直し後の議論

1. アンケート調査の実施と検討

安東 2019年3月の理事会で、一旦受け入れを決定されましたが、仕切り直しになりました。そうなった経緯をお尋ねします。

小山 一旦、2019年3月に理事会で、2020年度からのトランスジェンダーの受け入れを決定しているのですが、これは、後から振り返った時に、綿密な議論がまだ足りていなかったという評価をしています。その後、教授会から、まだ準備が整っていないじゃないかと言われて、仕切り直したのが2019年6月になります。最終的に受け入れが決まったのは2020年3月で、理事会で2024年4月、つまり4年後からの受け入れが決定されるという流れになります。

2019年度には、ガイドラインやマニュアルなどのバージョンアップを継続しながら、まず、2020年1月に学内教職員向けの説明会というか対話集会を行いまして、同じ月に意向調査を実施しました。受け入れること自体は、2019年3月に理事会で決めていますので、MtFの学生の入学に関して2020年の実施は時期尚早だとなったが、「1年ずらして2021年という時期は妥当だと思いませんか」という聞き方の意向調査を行いました。

浅田 職員のアンケートを取ったときに、「分からない」という意見が多くありました。実際、トランスジェンダーの友達がいるわけでもなく、お付き合いもないので、そういうテーマを取り上げられたとき、「分からない」という回答が多くありました。だから、逆にそこから先に進められないのかなと思ったので、どうにかして学内の方に、自分事にしてもらわなければいけないかなと考える1ヶ月だったかなと思います。

小山 学部ごと、附属機関ごと、事務局で分けて、統計を取っていますが、全体的に「分からない」が26.8%で、4分の1以上ありました。それから、「可能だと思わない」人が全体で27.5%、2021年から受け入れ「可能だと思う」人が45.8%ですから、数の上では「可能だと思う」が一番多くあったのですが、「分からない」と「可能だと思わない」で半分を超えていたので、冷静に考えて、「このまま突っ切るのはダメだよ」ということになりました。

私は、可能とする人が数的には多いのだから、もういけるかなと思ったなら、「違う、違う」と委員会のコアメンバーに言われて、思い直しました。そのときに頂いた自由記述の意見を、「可

¹⁴Mills College “Report on Inclusion of Transgender and Gender Fluid Students: Best Practices, Assessment and Recommendations” (Revised April 2013) <https://www.smith.edu/admission/studygroup/docs/Mills-College-Report-on-Inclusion-of-Transgender-and-Gender-Fluid-Students-Best-Practices-Assessment-and-Recommendations.pdf>

能だ」と「可能じゃない」と「分からない」に分けて改めて見直し、非常に感慨深かったです。自治体の調査などでも、対外的な答えとして「あまり反対はありませんでした」などとよく聞きますが、いろいろな懸念、漠然とした不安が、おそらく「分からない」には含まれているんですね。

人によって評価が違うかもしれないですけど、私がこの間、責任者としてやってきて、皆さんのご意見を聞いて、思うことがありました。本音の部分では何らかの違和感のある人でも、社会情勢に鑑みて、性が多様であることに対して、正面切ってそれは違うだろうとか、世の中には男と女しかいないだとか、そういうことはもう言えないし、国内外の情勢を見ても、異論を述べることはできないという中で、論理展開としては、「受け入れること自体は賛成なんだけど、まだ準備が整っていない」という論調で、決定の先延ばしを主張する見解があるなと感じてきました。

そういう見解の中には、もちろん純粹に、例えばインフラがこうだったらであるとか、ガイドラインがこう整えよといった意見も含まれました。しかしそれ以外にも、上述のように根底の部分では「性の多様性」自体を受け入れられない感覚があるのではないかと推測されるような方の感覚が潜在しているのではないかと感じてきました。

そういうものの中には、ある種のフォビア（＝phobia：＝嫌い）の感覚などもあるかもしれないし、あとは過去に、いわゆるシス（cisgender：性自認と割り当てられた性が一致する）男性との関係でいろいろ傷つきがあったとか、抑圧を感じたとか、そういったこととの連動の中で何か懸念を感じているとか、いろんなことがあると思います。従って、単にこれとこれの準備が整ったから、実施するのはどうですかなどと聞き続けてはダメだなとそこで思いました。それが課題、困難点でしたね。

表3. トランスジェンダー女性受入れの経緯③（仕切り直しての検討継続期）

時期	出来事
2019年6月	理事会にて、2021年度を目途に受け入れを延期し、目途が立てば再度機関決定をすることを了承
2019年6月28日	[奈良女子大学が2020年度からトランスジェンダー学生の受け入れを表明]
2019年7～10月	ガイドライン、マニュアル、Q&Aをバージョンアップするため、「既存委員会」、「各事務部局」、「15学科」の3方向より具体的提案を要請し、その精査を継続実施
2019年8月	全学生を対象とする意見徴収（通学生の2%、120件の回答、4分の3が肯定的）→12月結果公表
2019年9月21日	[宮城学院女子大学が私立で初めて、2021年度からトランスジェンダー学生の受け入れを表明]
2019年10月	ダイバーシティウィークの実施（昼休みを使い、学生に対して各種の映像を流したり講演会実施）
2020年1月	学内教職員向け説明会を実施（対話集会）
	その後、学内教職員向け意向調査を実施（受け入れ年次について、2021年4月からが妥当かを問う）
	（「可能」45%、「分らない」26.8%、「不可能」27.5%）・・・様々な意見が出される
	1月末、上記結果を受け、2021年度からの受け入れを見送り、準備を整えて2024年度から受け入れることを「大学改革運営会議」で検討して了承（教学サイドの意思決定機関との連携実現）
2020年3月	理事会にて、2024年度からの受け入れを決定

安東 意見を言わないだけであって、いろんな意見が隠れているわけですね。

小山 そうですね。匿名で書けるようにしたら、面と向かっては言えないような意見もありました。ヘイトスピーチなどを想定すると、自由に言えるよう保障することに限度はありますが、一方、自由に言えることは大事です。だから、そこから見えた課題をどう乗り越えたかということが大切ですね。

まず、何年（いつ）からインクルードしますという決定は2024年からとなりました。いつまでも先延ばしにはできないので、4年間という準備期間をうたうことで、準備が整っていないとの“言い訳（理由付け）”は突破したというのが、ある種の戦略というか作戦だったかと思います。

お茶大さんは、ガイドラインなども整っていなかったのだけれど、先にぱっと決めたら、その後、粛々と準備を始めたとおっしゃったんです。私たちには、そうしたやり方はダメだった。「ガイドラインなども見せてもらってないのに決めるとはどういうことだ」と言われました。それももっともなことなのですが・・・。

お茶大さんの学生規模は、本学人間社会学部一学部と同じ程度だから2000人くらいですかね。小ぶりの、そして国立大学ということで、ある意味で上意下達を通りやすいなど、いろいろな違いがあると思います。意思決定に関しては、本学ではお茶大のようにはなりませんでしたが、私たちのやり方はそれで良かったかなと思っています。4年かけてやりますと言って、実際に丁寧に準備もしていますので。

こういうことは、まず学内の法制度、ルールのようなものをしっかり決めることが大事で、これはある種、トップが決めることですね。これをしっかり決めることと同時に、ボトムアップの対話を怠らない、このバランスが大事なんじゃないかと思っています。お茶大の石井クンツ先生もおっしゃっていましたが、いつまでも対話、対話と言っていたら、10年経っても20年経っても、門戸は開かない。つまりいつまでも“漫然と対話”ではダメですね。

特に日本人は、法や規程をしっかりと決めると、それに従うという遵法精神がありますし、「それは法律違反だ」と言われると、急にぱたぱたと物事が変わっていくことがあります。例えば障害者差別解消法の制定後や、また障害者の雇用率の低いところの企業名を公表しますと言われたら、一生懸命雇用するようになるのであるとか、そういうところが北米などとはすごく違います。

ですから、差別禁止法としてのLGBT法も早くできたほうがいいと思います。だからといって、それを決めたら有無を言わせぬではなく、一人ひとりの中にある懸念や心配にはしっかりと向き合い対話していく、差別感情などがあればしっかりと正していく。この両方のバランスが必要じゃないかと思っています。

2. 学内研修会の実施

安東 2019年6月に受け入れ時期の仕切り直しをされたわけですが、学内で教職員向けの研修会などはいつ頃から実施されたのでしょうか。

小山 もともと、例えばハラスメント防止の研修会であるとか、障害学生支援をめぐる研修会を行なっているのと同じ並びで、研修会はやってきています。

行田 2019年くらいからです。

小山 そうですね。以前から研修会は行ってきていましたが、明確にSOGI¹⁵をめぐる課題を取り上げるようになったのは、2019年くらいからです。ただ、勤務時間外の夕方だと皆さん忙しいこともあり、関心のある人しか来ないですね。

安東 皆が出席するというわけではないですね。出ない人はどうしても出ない。

小山 そうです。ハラスメント防止の研修なんて、最も来ないといけない人に限って絶対来ないという笑えない事実もありますよね。

研修会に関しても、ダイバーシティ委員会アドバイザーの方2名と契約したのが2019年4月で、そのアドバイザーの方を3名に増員したのが2021年です。毎日勤務されるわけではないのですが、この方々がすごくブレンになってくださいました。研修に関しても、ただ知識を提供すればいいのではなくて、自分の中にある違和感、気づきなどを内省していくようなロールプレイを含んだもの、内なるバイアスに気づいていくようなロールプレイをしっかりとやりましょうということで、ついこの間、行なったばかりです。研修に関しては、そういう段階に進んでいます。

申し上げたように、研修というのは「これが正しいことだ」と括り、受講者や想定される当事者と切り離して考えるのでは全くダメで、自分の中にも、違和感とか差別意識ってあるだろうという前提で平らな関係でやり取りをしながら、自己省察をしていくプロセスがとても大事だと思っています。ダイバーシティ委員会アドバイザーが介入してくださるロールプレイの中で、あるいは事例検討の中で、少しずつできていくなという気はします。

3. 学生への周知とその受け止め

安東 トランスジェンダー女性の受け入れ検討を発表されて後、学生への説明会や意見聴取、さらには学生の受け止め・反応などはいかがだったでしょうか。

小山 2019年夏に学生から無記名で意見聴取をし、2019年8月時点で120件の回答がありました。全学生の約2%にすぎませんが、分量的にはそれなりにあり、いろいろな回答が寄せられました。

KJ法で質的に分析したところ、その中の4分の3が受け入れに前向きで、4分の1くらいに幾つかの懸念が見られました。また、ごく少数ですが、懸念や反対意見が直接学生課に手紙やメールで寄せられることもありました。

そういう学生の反応の中には、過去に自分が女性として被ってきた抑圧といった傷つきの表明があるケースもありました。トランスジェンダー女性を受け入れることは、いわゆる女性らしく見られることを望む人が、自分たちが被っていること、例えば、「見た目女性らしくしろ、化粧くらいしろ、お茶汲んでこい」といった、ジェンダー規範による抑圧に関する自覚とは逆行する形で、むしろ自分たちを縛る方向に行っちゃうんじゃないかというような、非常に真つ当な疑問を提示してくれる人もいました。

いずれにしても、手紙が来たなら単に手紙で応答する、メールにはメールで返すのではなく、ちゃんと顔を見て丁寧に話し合うという姿勢で対応してきました。ですから、大まかには前向きだし、誇らしい、そういうふうにしていきたいという意見が多い中であって、幾つかのタイプの懸念もありましたし、誤解や偏見もないとは言えないかと思います。

安東 学生からの自発的な動きはありましたか。

小山 LGBTQ+に関する学生のサークル活動としては、2018年秋に“さくらばれっと”という学生を中心とする団体が立ち上がりました。ダイバーシティ委員会もこれを応援しようと言っていた

¹⁵Sexual Orientation & Gender Identity (性的指向と性自認) の略で、性に関して、性的マイノリティに限らず全ての人を包括する概念。性の在り方はグラデーションであることを表している。

のですが、学外でのイベントに2回ほど参加したくらいで、メンバーも卒業するなどして活動が立ち消えになったことがありました。サークル活動は、活発にいろいろあったということではありません。こういうことは、学生さんが主体的に行なって、大学に突き上げてくるくらいだと元気だなと思うのですが、そういうことがなかったという感じですね¹⁶。

4. 同窓会や保護者への説明と反応

安東 私学ではとりわけ、同窓生や保護者の反応が気になるところかと思いますが、その辺はいかがだったでしょうか。受け入れについての趣旨やこれまでの経緯の説明などもされたのでしょうか。

小山 同窓生には、2018年末、“桜楓会”という卒業生の会の理事会で説明を行いました。15分くらいで終わらせてと言われていたのですが、いざ始まるとかなり長い時間をかけて「それはいいことなんじゃないか」「こうじゃないか」など、いろいろな意見が出る話し合いになりました。理事レベルの同窓生がすごく前向きの反応をしてくれました。また、大学から情報発信をしなければいけないということで、定期的に発行されているニューズレター『桜楓新報』に複数回、記事を掲載していきました。先ほど、朝日新聞に記事が掲載された直後に、「やめなさい」とのメールが同窓生から来たと申しましたが、他の同窓生からネガティブな反応は全くと言ってよいほどないですね。

安東 お話を聞いていると、そんなに反対はされていないようにも思います。スミス大学では、同窓会が割と反対したと聞いたんですけれども、日本女子大学ではそれはなかったですか。

小山 私たちの同窓会は反対しなかったですね。

安東 あまり意見を言わないのか、あえて言わないのか。あるいは、日本的な行動様式で言いたがらないのか、そうでもないのですかね。

行田 むしろ、一番に受け入れを打ち出さなかったことに怒られました。

小山 『あさが来た』の、ファースト・ペンギン (First Penguin)¹⁷ じゃないと怒られました。それは残念そうでしたね。

例えば学部・学科再編の中で、ある学科が消えるであるとか、名称を変えとなると、同窓会に絶対伺わなければいけないし、そういうときに反対の声が起きたりすることは一般論としてあると思うのです。しかし、この件をめぐってはそういう類いのことはほとんどないですね。でも、逆に不思議でした。

行田 卒業生の方からいくつかのご意見がありました。「(トランス女性が)女性のスペースに入ってくるのはどうして？」といったことを言われました。多分、出世などを含め、男性と比べて実社会でネガティブな経験されている中で、どうして女性だけの女子大学にそういう人が入ってくるんだといった内容のお電話は頂戴しました。その後、メールをくださいとお伝えしたのですが、電話でお話ししただけで終わっているの、納得はされたかどうか分かりません。

小山 保護者の皆様に関しては、“泉会”という大学レベルのPTAの役員会と委員懇談会で10月に説明をした後に、PTA連合という幼小中高大、全てのPTAの方が集まる会でも説明をしました。

¹⁶ その後、2021年より、レインボープロジェクト・シンフォニーという学生主体の団体が立ち上がり、活動を続けている。https://www.jwu.ac.jp/unv/topics/2022_1104_01.html (日本女子大学)

¹⁷ NHKの連続テレビ小説『あさが来た』(2015年9月から半年間放映)は、日本女子大学校の設立に尽力し、支援した者の一人である広岡浅子をモデルにしたドラマ。ドラマの中で、新たなことに挑戦する先駆者を「ファースト・ペンギン」と呼び、明治という家父長制の強い時代の中で、女性である広岡浅子の行動はそれに例えられた。

質問もされましたが、表立ったネガティブ意見はなかったですね。保護者の方がお勤めになっている企業でのダイバーシティの取組例を出して、「こういう時代だよ」という話しをしてくださったこともあり、皆さん、前向きに聞いてくださった手応えは感じました。

PTA 連合や“泉会”といった PTA 関係の親御さんに説明する中で、特定のいわゆる少数者をに入れてあげるとか、少数者に配慮するという話ではなく、このことを契機に、私たち全員が人権を守るよりよい大学になっていくんだという意図をしっかりと受け止めてくださる手応えみたいなものを感じてきました。この同窓会、保護者への説明に関しては、おおむねうまくいっているのかと感じています。

5. 学外からの反応

安東 では学外からの反応はいかがだったでしょう。ネットなどではいろいろ出ていたようですが。

小山 外部活動家や社会一般の反応ですが、受け入れを表明するとネットニュースに掲載され、コメントを見ていると、悪口レベルのものはたくさんありました。その中で印象的だったのは、「女子大学などと言っていたら成り立たないから、話題をつくろうとしている」であるとか、「もう女子大学は成り立たないから共学になったらいいんじゃないか」など、そういった類いのネガティブなコメントを幾つも見ました。もちろん、前向きに評価して下さるご意見もありましたが。

ただ、すごく気になったのは 2019 年 5 月に、お茶の水女子大学の受け入れ表明に対して、東京大学の三浦俊彦教授が侮蔑的な見解を提示したことです。「お茶大は滑りやすい坂を滑った」であるとか、「#木綿の天井」という発言¹⁸をされました。つまり、レズビアン女性は、トランスジェンダー女性に男性器がついていても女性と認めて、避けて性行為をするんだらうなどといった内容でした。ヘテロセクシュアルな関係であったとしても、誰とでも性行為をするわけではないので、意味が分からないのですけれども。

それに対して、お茶の水女子大学の石丸徑一郎先生をはじめ、何人もの識者の方が抗議声明¹⁹を出されました。先ほどの、宗教的な信念があって断固反対と言われる方も、あるいは学者であっても、ネガティブに言う人はいなくならないでしょうし、影響力の強い人の言説だと、ことさら言われる側は傷つき、エネルギーも消耗すると思いました。

1 件だけですが、見かけは男性に見える方が顔出しで、「女子と偽って入学して、性犯罪に及びます」と YouTube にアップしたことがありました。学外の方から教えていただき、事務局からの連絡で私も見て、すぐに YouTube に通報し削除していただきました。こういうことが出ると、学内の関係者であっても心配になることがあるので、そこが問題だと思っています。しかし、おおむね好意的に受け止めていただいているという感じです。

安東 ジェンダー研究の第一線で活躍されている方でも、トランスジェンダー女性の受け入れに関しては、否定的な方もおられます。なぜかという、学生の中にも男性を苦手とする人もいますし、性的虐待などのつらい経験をしている方もいます。ですから、そういう学生の思いを重視すると

¹⁸ 「お茶の水女子大『LGBT 支援』は超先進的でカッコイイ!! だからこそ罣が…元女子大教授が指摘!」(2019.1.4) https://tocana.jp/2019/01/post_19297_entry.html/ / 「『レズビアンたるもの、相手にペニスあっても女だと思ってヤレ』世界で広がる狂った LGBT 議論を東大教授が斬る! # 木綿の天井」(2019.5.14 掲載)などを掲載。 https://tocana.jp/2019/05/post_95219_entry.html

¹⁹ 東京大学及び東京大学出身の大学教員より「本学三浦俊彦教授によるトランスジェンダーに関するオンライン記事についての東京大学関係教員有志声明」が 2019 年 6 月頃に出された。
<https://statementontgarticle.mystrikingly.com/>

ということで、トランスジェンダー女性の受け入れに反対を表明しているターフ（TERF：trans-exclusionary radical feminist）と呼ばれるジェンダー研究者もいるということですね。

小山 トランスジェンダー女性といっても、様々な方がいらっしゃると思います。私の印象ですが、大きな誤解の一つとして、トイレで出会ってびっくりしたらどうするんだといった見解は、トランスジェンダーの女性を、明らかに男性なんだけど、女性ふうにしている性犯罪予備軍みたいに語る、非常に偏見と誤解に満ちた見方だと思います。ちなみに女性装の方と性犯罪をセットで語ることも大きな偏見であり人権侵害です。いずれにせよ、トランスジェンダー女性は女性であり、女子大学とはすべての女性にとって安全な場だと認識しています。

IV. 受け入れ公式発表後の準備

1. 入学に際しての事前チェックとガイドラインの作成

安東 2020年3月に、理事会にて2024年からのトランスジェンダー女性の受け入れを決定し、6月の学外公表を目指して準備に取りかかられました。その際、大きな課題の一つが入学試験に際してのチェックのあり方かと思います。宮城学院女子大学は事前のチェックをしないということだったのですが、お茶の水や奈良女は、入学後のサポートのため、原則として事前相談を求めるということでした。入試の際に、どのような準備態勢を取られようと考えておられますか。

（浅田部長退室）

小山 受け入れに向けての準備については、今、ガイドラインをつくっていて、鋭意更新中なんです。15学科からそれぞれ意見を出してもらい、8月上旬にコアメンバーで集まって検討をします。それらを決めた後に、ダイバーシティ委員会を経て、学内への説明会をします。

行田 学内の説明会を、(2022年)11月上旬頃に予定しております、その後もう一度、学内パブリックコメントを広く募ります。意見を受けた上で年内に調整をして、来年(2023年)度の前期には公表をしたいという流れです。2023年度前期にお出しすれば、来年度入試を受けられる方にも間に合うかなというところで、今、その調整を行なっているところです。

小山 学園一貫教育研究集会におけるやり取りがあり、まず、オンデマンドで当事者の声を含む映像及びお茶の水女子大学の石丸徑一郎先生の講演を視聴した上で、学内から自由にコメントを頂き、いただいた意見に対し私が応答する形で少しお話もさせていただくことになっています。そういうことを体系的にやっつけていこうと思っておりますが、最終的な確定はまだこれからなので、あまり言えない部分もあります。

ただ、最初は事前面接をするつもりでいしましたが、今はしないと思っています。書類確認だけ行います。なぜなら、当事者だけが事前に来るとするのは、余分な負担をかけることになり、公平ではないということです。あとは、お茶大さんと一緒だと思いますが、書類は医師の診断書、親御さんや高校の先生、あるいは支援団体がお書きになるような書類で、女性として生きてきたし、生きていきたいといったところを確認すれば、それでもう十分ではないかと思っています。女性と自認していることの確認さえすればよくて、面談はしないということです。

大切な原則として、特定の少数者に対する配慮というよりは、全学生と卒業生に資する柔軟な仕組みを再構築していくことを重視したいと思っています。今でも通称の使用は可能で、例えば結婚前の名前を使うことは十分にできていますし、卒業後に姓名が変わり、書類を受け取りに来るとき、旧姓と新しい名前を併記するようなことができるよう、事務局レベルで検討してもらっています。まだ確定ではありませんが。

今、私たちが言っているのは、太郎（M）が花子（F）になる方を中心に考えていますが、学内に既にいる人で、花子（F）が太郎（M）という逆の例であっても、本人が望んで相談にみえれば、もちろんできるような方向で考えています。

安東 その他の準備についてお聞きます。設備面で、共用トイレなどは増設されていますか。

小山 いわゆるバリアフリートイレ²⁰を各棟に必ず一つは設置し、現在、23か所あります。着替えをするためのフィッティングボードも備えています。トイレ問題は個別性が高いので、皆がそこを使えばいいというわけでもありません。もし本人や他の学生が何か違和感を抱いたらどうするかといった場合には、その場で一緒に考えていこうということです。

安東 制度面になりますが、卒業に際して、卒業証書にこの名称を使ってくださいと学生が言ったとき、それは現在、可能なのですか。

行田 証明書担当部署にご相談いただくことになります。

安東 在学中に性変更した場合も、卒業はできるということでしょうか。

小山 もちろんです。それもできると考えていますし、サポートをしたいということです。

表4. トランスジェンダー女性受入れの経緯④（実際の受入れに向けた体制整備期）

時期	出来事
※2020年2月～	新型コロナウイルスによる行動制限などの影響を受ける
2020年3～5月	トランスジェンダー学生の受け入れについての学外公表を6月下旬と決定（3月） 「ダイバーシティ委員会」で、①公表関連の検討、②女子大における受け入れ理念の検討、③2024年まで4年間の啓発活動の検討、④附属校園の対応、以上4グループに分かれ検討を進める
2020年6月19日	学長（篠原聡子）名で、2024年度よりトランスジェンダー学生の受け入れを公表
2020年12月	オンディマンドの研修動画を学生及び教職員向けに配信
2021年5～6月	新執行体制下の委員会として活動の仕切り直しと実行。特に学内の周知活動のあり方、学外からの問い合わせへの適切な対応のあり方などを検討 / 理念検討の新体制の構築
2021年5～6月	オンディマンド視聴など学内の啓発活動（①知識獲得→②気づきと対話→③行動変容へ）
2021年5～7月	学生主体の活動の立ち上げ（複数学部、学年の学生と5回の話し合い）
2021年9月～	1年生向け基礎編動画を配信 / 遠隔方式でお茶の水との情報交換 管理職対象のワークショップ実施（アンコンシャスバイアスに気づくためのロールプレイなど）
2021年11月	教員による連続セミナー第1回の開催（翌年2月に第2回セミナー、5月に第3回セミナーを実施）
2022年3月	理事長の命により、「ダイバーシティ宣言」の検討を開始
2022年4月	オリエンテーションプログラムで1年生向け啓発動画を配信
2022年6月	ダイバーシティ宣言確定とHPへの掲載
2022年7月～	ガイドラインの更新作業 / 職員対象研究実施（ロールプレイなど）

²⁰ 小山教授によれば、その後、2023年に入って百年館1階にオールジェンダートイレを設置する検討が進み、同年秋には女子トイレ1か所がオールジェンダー用に改修され、スタートすることになっている。

安東 授業や宿泊を伴う行事、学外実習、クラブ活動での対応はいかがでしょう。

小山 学外での様々な機会における説明は、一にも二にも、学生本人がそこをどう考えるかということとでしかありません。先ほども申しましたが、ガイドラインは今、ほとんどできているのですが、更新中です。特定の誰かのためだけでなく、皆に資するものであるということ、事務局レベルでも、すごく汲んでくれる雰囲気を感じており、学内の検討姿勢が前向きだと感じています。どの大学でもそうかと思ったら、結構そうでもない所の話も聞くので、よかったと思っています。

中西 やはりうちが時間をかけたのがよかったですね。

行田 2年間、頑張った成果なんです。

小山 急がなかったからよかった。本当に、最初の頃と比べると、隔世の感があります。

行田 最初つくったガイドラインとの差に驚きましたね。

安東 最初は、いつ頃つくられたのですか。

小山 受け入れ決定を決めたときだから、2019年につくりました。「やればできるじゃないか」とか言われたんですが、今、見たらダメですね。今つくっているものも、ダメなところもあると感じていて、随時、更新していかないといけないと思っています。(中西学部長退席)

2. 学生向け講習・説明会とそこで出された不安への対応

安東 受け入れ公表(2020年6月)後の準備として、ダイバーシティウィークの実施や、オンデマンドで映像を流されたりしたとのことですが、学生たちの反応についてお聞かせください。

小山 学長、理事長に、全員が必ず見ることにしないとダメだとも言われ、12分くらいの啓発動画を作成してオンデマンドで流しました。ただ、全員が必ず視聴できる仕掛けをさらに工夫しないとダメだという反省があります。また、意見や質問があれば、いつでも遠慮なくダイバーシティ推進室宛に問い合わせができる体制を取っています。問い合わせが寄せられたときには、その都度、丁寧に面接をしようとしています。

私たちもすごく反省することがあります。例えば「トランスジェンダーの人にこういう権利があると言うのであれば、義務は何ですか」という質問が来たことがありました。これに対して、「権利と義務はそのようなセットではなく、義務があるとすれば、あなたと全く同じ、すなわち、しっかり勉強して学位を取って出ていくことだ」のように、理屈で答えようとしたことが当初はありました。しかし、ダイバーシティ委員会の中で、「一見、男性に見えるような人が女性として学園にいたら、不安ということがあるのかもしれないよ」と言ってくださったメンバーがいて、言葉には言葉で返すのではなく、質問者がどういう思いで言ったのかということに寄り添い、しっかり対応していく姿勢にしなければダメなんだと反省した時期がありました。

それから、2021年の前期に学生団体のレインボープロジェクト“シンフォニー”²¹という素敵な名前の学生団体が、SOGIの課題だけではなく、宗教のこと、その他様々なダイバーシティについて話し合ってみたいと立ち上がりました。そこで、11月から12月にかけて1週間、ダイバーシティウィークをつくって、昼休みに短い動画を見て、学生たちがそれについて話し合うこ

²¹2021年春、「セクシュアリティについて考え、学生同士でシェアするきっかけを提供する」ことを目標に立ち上げられた。同年11月29日～12月3日の5日間、学生が企画した学内イベント「多様な性を考えよう」を開催した。https://www.jwu.ac.jp/unv/topics/2022_1104_01.html (日本女子大)

²²『『女子大でなくなる』懸念 トランスジェンダー受け入れ 重ねた対話』<https://www.asahi.com/articles/ASQ8N77LTQ8HUTIL001.html> (朝日新聞)

とをしました。本学の取組を紹介する記事が、2022年8月22日の朝日新聞に掲載され²²、21年のダイバーシティウィークの様子も写真で紹介されました。

行田 2021年には井手上漠さん²³へのインタビューやエマ・ワトソンさんが国連でスピーチした映像²⁴などを流しました。

小山 助産師のシオリヌさん²⁵の、性について調べてみようなど、幾つかの動画を見て、前向きな話し合いをしました。今年もそういうものを実施しようと、今、準備中です。

3. これまでの取り組みに対する評価と課題

安東 これまで様々に準備をされておりますが、現段階での評価や課題点はいかがでしょうか。

小山 今回のインタビューがあるということで、これまでに皆さんから頂いた手書きや口頭での意見をもう一度見直して、また新たな発見もありました。私自身を含め、いろいろな懸念、違和感は必ずしもすべてが否定されるべきものではないと思います。宗教的な信念から絶対ダメだと思う人もいれば、すごく誤解していたけれど、そうじゃないと伝えると納得する人もいます。あるいは差別・偏見もあるなど、様々な要素がない交ぜになっていると思います。それぞれに対して、どう対峙していけばいいのか、どう話し合いをしていけばいいのか、どこかでスパッと切って、それは人権侵害であり、差別ですとはっきり言ってしまうといけないのか。その仕分けをどういうふうにしていくのかが、一番の課題だったかなと私は思うのです。

振り返ってみると、構成メンバーの意識に、「起こり得る全てのことに対する正解を提示せよ」というような姿勢、雰囲気がありました。大切なのはそういうのではなく、諸種のジレンマもある中で、常に自分たちの頭で考え続けなければいけないのだということを伝えました。研修の中では大分変わってきたと思いますが、そういう気持ちもやむを得ないと思うときもあります。私だって、どう対応していいか分からない人と接したときに、この人を傷つけてしまったらどうしようという心配や恐怖感があります。けれども、少しも失敗しちゃいけないかという、それは違う。意図しなくても、人を傷つけることはこの課題に限らずあるし、悪気がない人の発言で自身が傷つくことだってあるわけです。そこら辺はもうちょっと余裕をもって考えようという雰囲気を広めたいなと思っています。

次に、女子大学だから選んだという人の中に、ジェンダーによる抑圧であるとか、被害を受けてきた人がいる可能性を踏まえて、幾つかのレベルで、そうした人への対応を考えていかねばならないと思っています。そのためには、まず、本当に今の今、回復のために治療的なことが必要なら、カウンセリングセンターにつないだり、医療機関を紹介したりすることが必要です。そういった当事者の経験に、質や量の違いはあっても、似たような経験をした者同士が力づけ合うよ

²²2003年、男子として誕生。2018年にあるコンテストで「可愛すぎる男子高校生」として注目され、現在はタレントとしてエッセイ執筆やファッションブランド立ち上げなど幅広く活動している。インタビューでは「性別はないです」と答え、自分らしく自然体で生きようとする姿勢は広く共感を呼んでいる。<https://mainichi.jp/articles/20220330/k00/00m/200/004000c> (毎日新聞) 及び <https://www.discovery.co.jp/talent/%E4%BA%95%E6%89%8B%E4%B8%8A%E6%BC%A0> (プロダクション)

²⁴国連の女性機関“UN Women”の親善大使を務める俳優のエマ・ワトソンが、2014年9月21日、男女平等と女性の地位向上に男性の支援を促そうとする「He For She」運動の立ち上げ発表の演説を国連本部で行った。https://www.unwomen-nc.jp/?page_id=13 (国連ウィメン日本協会)

²⁵助産師の大貫詩織さんが、シオリヌという名前のYoutuberとして、性教育など、SRHR(性と生殖に関する健康と権利)に関する情報の発信を行っている。

<https://www.youtube.com/channel/UC4bwpeycg4Nr2wcrV9yC8LQ>

うな学生同士の活動を促すことです。これは先のレインボープロジェクト“シンフォニー”もそうですが、そういう当事者活動を側面からサポートする必要があります。三つ目は、一般論としてお聞きくださったようなジェンダー専門科目などの中で、そういった話題を提供し、学生を力づけていくような授業が、十分に用意されなくてはいけないと思っています。お茶さんから、そういう10科目くらいを括って、“全学ジェンダー学際カリキュラム”としてサーティフィケート（証明書）を提供する試みを教えていただきました。私たちも今まで、副専攻であるとかいろいろなことを行なってきたのですが、それに準ずるものとして、そういう科目の括りを提供できるといいですね。

西尾 私どもは、共通教育科目の中には“ジェンダー科目群”があって、そこには今、8科目くらい入っているんです。目下、1科目だけでも必修化するかどうか、そんな話が出ています。

小山 そうですか。私たちも、今はキャリア科目の中に、多様な働き方とかダイバーシティのことが組み込まれるようにはなっているんです。10科目を括ってと言うのは簡単だけど、皆が取れるようにするのは難しいなと思っています。

安東 やはり規模もありますよね。日本女子大では6,000名、武庫川は短大を含め1万名近くの学生がいますので、必修としたなら、その単位が取得できなければ、卒業できないとなるわけで、教務課は怖がっているんです。

小山 なるほど。でも、そういうことをしないと、女子大学の意義ってなかなか分からないですし、浸透していかないかなと思っています。それが課題であり、困難ですね。

安東 これまでの取り組みの中で、これは手応えがあったと感じておられるのはどのようなことですか。

小山 成功や効果が実証されているわけではないのですが、手応えを感じて進めてきたと思われる内容は、繰り返しの情報発信と、意見をいつでも受け入れるという開かれた姿勢ですね。

それから、ここまで意思決定に向けて、教員と職員がすごく対等に対話をできたことを実感していきまして、教職協働で議論を継続できたのは大きかったです。ダイバーシティ委員会のメンバー構成がそういうふうになっていますし、その中で、幾つかのグループに分けて役割分担をしたり、また時期によっては、委員会のメンバーではない事務局の課長レベルが事務局ワーキングという形にウイングを広げて実務的な検討をしてくれたりしたこともありました。そういう形で、いろいろな人たちがしっかり関わって民主的に議論すること、そうした土壤があることがよかったと思います。

その他、「最後の一人が賛成するまで時を待つことはできない」という原則を踏まえ、メンバー内にある懸念を受け止め、きっちり（トランスジェンダー女性を）インクルードする時期を定めました。この4年間の話です。それが本学にとっては成功だったと言えるかと思っています。悪口も言われましたが、その“4年間”というものを、本学の本気度の指標として見てくださった外部の意見もあったので、ありがたかったです。さらには、全ての学生が視聴する動画の作成や前段でも述べた内なるバイアスに気づきを得るためのロールプレイを導入した職員の研修会などを挙げることはできでしょうか。

これまで言いませんでしたが、じっくり腰を据えて女子大学の存立意義について深めるための連続セミナーも、委員会の中だけになります。行なっております。例えば、ダイバーシティ委員会内で質疑することを、各専門の立場から多角的に議論することへ広げる努力などを行っています。こういうものを集積していずれアーカイブ化し、皆が見られるようにしようとしているんです。女子大学のミッションをもっとしっかりと言語化していくに当たり、役に立つのではないか

と考えます。今日、明日の成果にはならないかもしれないですが、ここを外したら、ダメなんじゃないかと思っています。やはり、女子大学って何なのかということは、しっかりと時間をかけてテーマを決めてやっていくほうがいいと思いますね。

現在、学部学科再編の話が学長からあり改革に直面しているのですが、そのとき、女子大学の意味であるとか意義をバージョンアップしていくことに向けて、しっかり学問的、理論的に深めていくことが、今こそ必要だろうなと思っています。女子大学の存立意義を再考していくことに向けた学問的な取り組みを、ぜひ他の女子大学さんと共同して、教えていただきながら、一緒にやりたいなという思いはあります。

安東 なぜか女子大学だけが殊更にトランスジェンダーの受け入れで注目されています。トランスジェンダー当事者の視点から女子大学を捉え直すことは重要な課題ですね。

小山 これまで理論的にも勉強していくプロセスで、ハッと思ったことがあります。トランスジェンダーの方は、生まれた時に性別を男性として割り当てられたけれども、女性と自認し、いちいち「私がトランスジェンダーです」などと言うことなく、普通に女性として日常に埋没して生きていくだけの話という場合も多いと思います。もちろんその逆もあり、中には性別を移行したということを大切なアイデンティティとしてカムアウトする場合もあることは承知しています。この場合、その方たち自身はトランスしたという多様性はあったとしても、男性でも女性でもないというノンバイナリーの人はどのような困り感に直面しているのかなど、分からない、実感できないわけです。だから、組織としては、「性は多様だよ」と言ってアライ（Ally）になろうと言うけれど、一人ひとりには普通に女性であるにすぎない。そこにどう向き合っていくかということとは、しっかり考えていかなければいけないし、先ほども出たような、女性としてのジェンダー規範を強化するような方向に行っては決していけない。皆がもっと自由で、解放された女性として生きていくとはどういうことか考えなければいけないと思っています。

だからこそ、男性と自認するようになったトランス男性も、その逆の人も、ノンバイナリーの人も、レズビアンの方も、皆が連帯できる部分もあるでしょう。ただ、“抑圧の交差（Intersectionality）²⁶”という概念も最近話題になりますので、暢気に皆が連帯できるなんて言い切ってはいけない。それでも何らかの形で連帯できるからこそ、ここに女子大学があっけないんじゃないか、なくちゃいけないんじゃないかと考えているという感じですね。

安東 たいへん重要な指摘だと思います。女子大学であるからこそ取り組まねばならない課題もありますね。本日は多岐にわたりお話をいただきまして、ありがとうございました。

西尾 本当にありがとうございました。

小山 こちらこそ、ありがとうございました。

行田 ありがとうございました。

付記

このインタビュー記録は、2020-24年度 科研費・基盤研究（B）「大学におけるトランスジェンダー学生の受け入れ課題：日米の女子大学事例を中心に」（20H01639）による研究成果の一部である。

²⁶ インターセクショナルリティ（交差性）とは、弁護士でUCLA教授のKimberle Crenshawが作った概念で、「社会的アイデンティティが複数重なり合うことによって、複合的な差別体験が生まれる」との捉え方。認定NPO法人国連ウィメン日本協会 <https://www.unwomen-nc.jp/?p=1858>